

〈研究ノート〉

高齢化社会と地域福祉 (15)

——高齢者の生きがい研究の地平——

高崎 義幸・日隈 健一

(受付 2008年10月31日)

目 次

- I. 序 論
 - 1. 研究の背景と目的
 - 2. 高齢化の状況と高齢者を取り巻く環境
 - 3. 高齢者と家族, そして地域社会(広島県・旧芸北町)における「生きがい」との相関分析
 - 1) 価値観 あなたにとって大切なものは何ですか
 - 2) 例えば, 生きがいと神楽
- II. 高齢者の生きがい研究の類型
 - 1. 高齢者の生きがい概念に関する研究
 - 2. 高齢者の生きがいに関する諸調査と生きがい感測定尺度
- III. まとめと今後の課題
 - 1. 構造と機能からみた高齢者の生きがい感

I. 序 論

1. 研究の背景と目的

社会・経済が安定期に入り, いわゆる成熟した社会を迎えたと言われ始めた頃から, 同時に日本では, その安定・成熟した社会特有の現象ともいわれる少子・高齢化の進行や平均寿命の延伸化などが社会問題化し, 具体的な政策対応が緊急の課題となっている。

今日の社会福祉政策は, 1970年代半ば, いわゆる臨調「行革」路線の中で展開された。当初は, 経済の低成長への移行や財政危機などへの対応として始められたが, 間もなく, 市場経済の活性化こそその打開策となるという新保守主義, 新自由主義といわれる立場から国による規制をはずし, 公的部門も民営化し, 市場経済にゆだねるという, いわゆる「市場福祉」化したのが1980年代である。つまり, 社会保障, 社会福祉における国民負担増と公負担減がこの方針のねらいという批判もあった。その中で高齢者の社会保障給付費(年金・医療費・

福祉・その他)の増加に対する政策的な議論と合せて定年退職後から亡くなるまでの長い期間をいかに健康で幸福に過ごすかという個人の問題を解決するための議論が行われながら、超高齢社会における新しい社会福祉システムの構築が始まっている。

今回の報告におけるキーワード「生きがい」については、とくに行政分野において取り上げられたのは、「誰もが健康で、生きがいをもち、安心して生活を過ごす」ための「長寿、福祉社会」の実現を目標とした通称「ゴールドプラン」と呼ばれた高齢者保健福祉5ヵ年計画(1989年)や高齢社会対策大綱(2001)などである。高齢者の雇用・就業の機会の確保や学習・社会参加活動の促進、介護予防活動の促進が図られ、また、民間分野においては、企業の雇用期間の延長や目的集団(NPO・NGOなど)の活動が広がりを見せる中で、生産活動や健康維持活動を支援・創造していく際のキーワードとして「生きがい」という言葉が国の施策や研究者の間で頻繁に使用され、高い関心を集めるようになってきている。

しかし、「生きがい」という言葉は馴染み深いものであるにもかかわらず、その意味は多義的・あいまいで国や地方自治体の計画などにおいてもはっきりとした定義づけがあったわけでもない。しかし我々の一連の高齢者の意識研究調査を通じて、「生きがい」と健康寿命、あるいは高齢者の生活態度、意識との相関が強いことは明確であったし、高齢者支援施策の実践や研究が有効に行われるためにも高齢者の「生きがい」の定義や概念が明確にされる必要はあった。そこで本報告(研究ノート)では近年の高齢者の生きがい研究の動向を分析し、今後の研究における基礎的資料とすることを目的とした。

2. 高齢化の状況と高齢者を取り巻く環境

平成20年版高齢社会白書(2007年10月1日現在)では日本における65歳以上の高齢者人口は2,746万人、総人口に占める割合(高齢化率)も21.5%と、初めて21%を超えた。また、そのうち、いわゆる65歳から75歳までの前期高齢者は1,476万人(11.6%)、75歳以上の後期高齢者人口は1,270万人(9.9%)と「本格的な高齢社会」となっている。さらに今後の高齢化率の変化は2013年には25.2%、2035年には33.7%という推計もされている。

高齢化による社会保障給付費は、2005年度は87兆9,150億円と国民所得に占める割合は1970年度の5.8%から23.9%に上昇している。これは前年度と比べ0.4ポイント減少している。

また、65歳以上高齢者のいる世帯(2006年現在)は、全世帯の38.5%。そのうち、「単独世帯」が22.4%、「夫婦のみの世帯」が29.5%、「親と未婚の子のみの世帯」が16.1%、「三世帯世帯」が20.5%となっている。今後は「単独世帯」の割合が上昇し続け2030年には39.0%になると推計されている。

さらに、高齢者の健康状態についてみると、半数近くの者が病気やけが等のなんらかの自覚症状を訴えているが、健康上の問題で日常生活に影響のある者はその約半分で、全体

の4分の1となっている。

介護保険制度における要介護者又は要支援者と認定された者のうち、65歳以上の者は2006年度末で425.1万人、高齢者人口の16.0%を占めている。

上記のことと合わせて、65歳以上高齢者のうちなんらかの自覚症状を訴えながらも日常生活に支障があるわけではない者は75～84%であることがわかる。補足的に世界保健機関の推計をみると、日本の場合自立して健康に生活できる年齢である健康寿命は、男性72.3歳、女性77.7歳で世界一である（2002年）。平均寿命は今後も延伸するという推計がされており、それだけに健康寿命をどう延ばしていくかが課題となっている。そしてその定年後の長い生活をいかに健康で幸福に生きるかについての研究は、老年学における活動理論、離脱理論をはじめとし、社会学においては役割理論や相互行為理論などからの接近が試みられてきた。

繰り返しになるが我々の調査研究においても高齢者がいかに健康で幸福に生きるかについてのキーワードとして「生きがい」という言葉を使用してきたが、直接的に「生きがい」を質問項目に設定したのではなく、「生きがい」を支えている日常生活での生きる喜び（現在）、これまでの人生における感謝や誇り（過去）、そしてこれからの人生に対する生き方（未来）を、日常生活動作能力（ADL）、身体的健康度、経済的状況、家族関係、精神的支え、道具的サポート、公的サポート、役割、積極性、地域満足度、自己満足度、社会参加度、活動参加度など、高齢者の「生きがい」を支えている内実的要素を構成するものを測定調査することで、健康寿命と相関度が高いと判断された「生きがい」に代用するものとした。超高齢社会を迎えた日本において、今後人口構成上マジョリティとなる高齢者自らから「健康¹」で自立・自律した生活を営んでいくことは超高齢社会を生きる社会成員としての責任でもある。

3. 高齢者と家族、そして地域社会（広島県旧芸北町・現北広島町）における「生きがい」との相関分析（日隈他、2001、2004、2008）

表1をみると、加齢とともに身体的健康の低下は見られるものの、ADL自立との相関は見られなかった。これは身体的健康度は主観的健康度であるため、日常生活の能力であるADL自立にまで支障が見られないと考えられる。伝統的に親から子へと受け継がれる、いわゆる地域の“習慣”とも呼ぶことができる『社会参加度』が低下するにも関わらず、「ふれあい

1 厚生労働省報道発表資料平成11年3月19日によると、世界保健機関（WHO）は、憲章前文における「健康」の定義を「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と定義してきたが、「健康」の確保において生きている意味・生きがいなどの追求が重要との立場から、1998年のWHO執行理事会において、健康の定義を「完全な肉体的（physical）、精神的（mental）、Spiritual及び社会的（social）福祉のDynamicな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と改める改正案が議決された。

表 1 相関係数からみる高齢者と家族と地域社会

	年齢	性別	世帯構成
年齢	1.000		
性別	-0.019	1.000	
世帯構成	-0.051	-0.094	1.000
A D L	0.028	-0.192	0.074
身体的健康	-0.242	-0.138	-0.106
経済的状況	0.104	0.159	-0.134
家族関係	-0.186	0.001	0.056
精神的支え	-0.059	0.017	-0.132
道具的サポート	-0.027	0.155	0.022
公的サポート	0.269	-0.010	-0.211
役割	-0.091	0.530	-0.183
積極性	-0.146	-0.425	0.260
地域満足度	0.127	0.145	-0.026
自己満足度	0.322	0.011	0.033
社会参加度	-0.063	-0.096	-0.178
活動参加度	0.416	-0.026	-0.212

サロン」, 「介護予防教室」, 「ことぶき大学」という行政が新たに作り出した『活動参加度』の上昇が目立つ。これは高齢者の地域役割の移行と見られる。そこでの活動では、趣味のクラブ活動やグランドゴルフ等の集団活動を主に行っている。これは、高齢者の生活イメージが“孤立”し、結果として“寝たきり”になったという従来までの高齢者福祉を脱却した地域福祉の理念である福祉のまちづくりの成果と考えられる。そして加齢とともに『自己満足度』の上昇も見られた。これは人生にとって“加齢とともに自分も満足できる”というモデル的な構図である。しかし、ここでは「不安・不満が少ない」というだけの満足度であるため、人間の欲求という部分も含めると疑問が残る。具体的にはゴールドプラン以来、“在宅福祉”という福祉計画が進められている反面、高齢者の意識には“施設福祉”の要求がある。「・・・在宅介護が中心で、重い病気は中核的都市の病院で対応する。国や県からそういうし指導がありまし、私も同じ思いですが、それでも、一人で寝ているお年寄りには近くに入院や入所できる施設がないと不安が残るのですね」と行政で保険、医療、福祉の担当課長を経験した S 氏はインタビューに答えている。「遠くに住んでいる子どもたちも、それで少しは安心します」とも（日隈他, 1996, P-153）。

高齢者が在宅から施設入所へのニーズが強いことは次の「価値観」の回答からも読み取れる。

1) 価値観（あなたにとって大切なものは何ですか。）

『あなたにとって大切なものは何か』という質問では、「家族」、「友人」、「健康」、「仕事」、「お金」、「趣味」、「土地」の7項目を挙げ、「1位」であれば7点、「7位」が1点と得点化し、その平均点を算出した。

まずその単純集計と平均点を見てみると、約8割の人が「家族」（平均点、6.43点）と「健康」（6.27点）で1、2位に答えており、2位と3位の差は大きく開き、「お金」（4.60点）、「友人」（3.88点）、「仕事」（3.02点）、「趣味」（2.24点）、「土地」（1.87点）という順位をつけた人が多い。

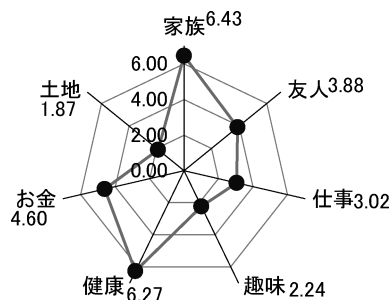


図1 あなたにとって大切なもの

図1から高齢者の価値観で「家族」が最も大切なものであることがわかる。

その大切な家族に迷惑をかけたくないという事情が施設入所のニーズを高めている。高齢者が家族に迷惑をかけないこと、それは健康寿命を延伸し、それだけ自立するということがある。その相互作用をどのように考えるのかが今後の課題でもある。

表2を参考にしながら、「生きがい」を支えている要素を年齢と高齢者の生活構造からみていく。『身体的健康度』は『ADL』（ $r=0.414$ ）と最も相関が高かった。次いで『地域満足度』（ $r=0.313$ ）, 『自己満足度』（ $r=0.262$ ）, 『積極性』（ $r=0.257$ ）, 『社会参加度』（ $r=0.247$ ）と弱い正の相関関係があり, 『経済的状況』（ $r=-0.262$ ）とは弱い逆相関があった。

また『ADL』は『積極性』（ $r=0.410$ ）, 『社会参加度』とやや相関関係があり, 『経済的状況』（ $r=-0.262$ ）とは弱い逆相関関係があった。

『ADL』と弱い相関関係にある『積極性』は『公的サポート』と弱い逆相関関係（ $r=-0.261$ ）にある。

『家族関係』は『地域満足度』（ $r=0.362$ ）, 『積極性』（ $r=0.310$ ）と弱い相関関係がある。

『自己満足度』は『地域満足度』（ $r=0.362$ ）と弱い相関関係にあった。

繰り返しになるが, 『社会参加度』は世代交代により, 地域の役割を終えた人の新たな活動の場として「ふれあいサロン」, 「介護予防教室」, 「ことぶき大学」等の行政と町の組織が

表 2

	A D L	身体的健康	経済的状况	家族関係	精神的支え	道具的サポート	公的サポート	役割	積極性	地域満足	自己満足	地域参加	活動参加
身体的健康	0.414	1.000											
経済的状况	-0.079	-0.262	1.000										
家族関係	0.344	0.194	-0.353	1.000									
精神的支え	-0.049	0.032	-0.120	0.103	1.000								
道具的サポート	-0.026	-0.034	-0.178	0.155	-0.101	1.000							
公的サポート	-0.121	-0.029	0.030	-0.188	-0.106	0.102	1.000						
役割	0.056	0.044	0.051	0.105	0.078	0.125	-0.027	1.000					
積極性	0.410	0.257	-0.219	0.310	0.182	-0.049	-0.261	-0.064	1.000				
地域満足度	0.316	0.313	-0.200	0.362	-0.042	0.272	0.045	0.152	0.048	1.000			
自己満足度	0.285	0.262	0.048	0.000	-0.090	0.055	0.117	-0.011	0.088	0.362	1.000		
社会参加度	0.405	0.247	0.115	0.210	0.048	-0.048	-0.048	0.189	0.256	0.062	0.184	1.000	
活動参加度	0.323	-0.037	0.118	0.108	0.181	0.030	-0.116	0.116	0.186	0.019	0.250	0.337	1.000

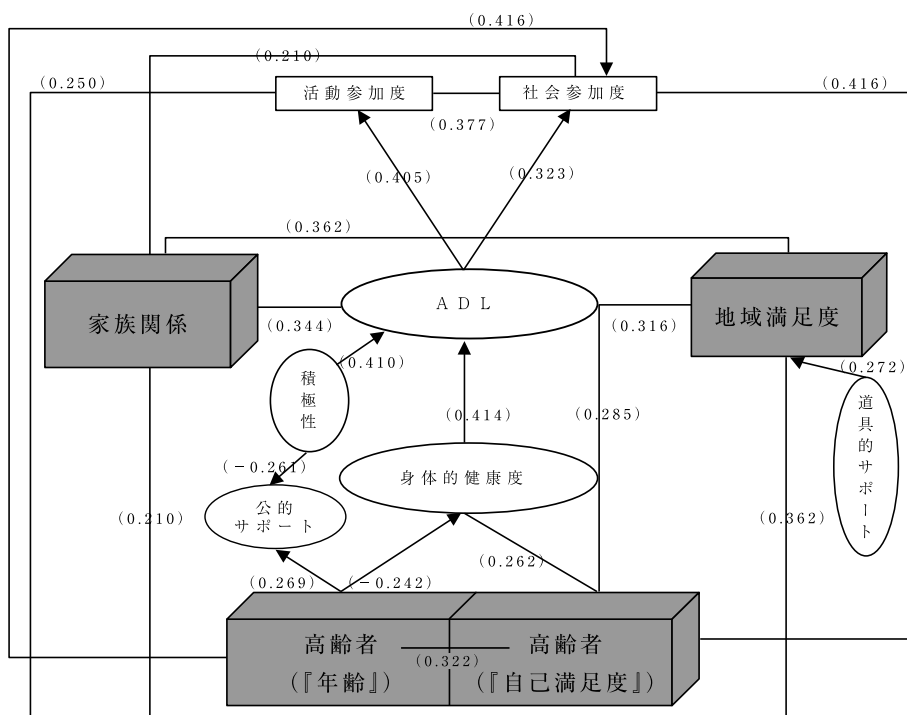


図 2

用意した活動への参加により『自己満足度』を押し上げているものと思われる。そこでは高齢者というステイグマを張られ、社会の中での役割を失ってしまうのではなく、高齢者一人一人、個として“地位”と“存在”を与える場であると考えられる。

2) 例えば、生きがいと神楽

これまでの研究（広島県旧芸北町）でも、健康と生きがいの相関の高さに注目し、さらに生きがいを支えている要因の発見に努めてきた。地域社会への参加、家庭や地域での役割といったものが、高齢者に「生きがい」を与え、健康の源泉にもなっていることがこれまでの調査結果から判明するに及んで、さらに「生きがい」の内実の発見に努めてきた。それは個々人の趣味であったり、それは個々人の経済力や健康度や価値観によって大きく分かれていたものであったが、広島県、特に北西部における伝統芸能である神楽は、他地域ではみられない農山村地域における高齢者と青壮年、そして若年層とのコミュニケーション機能をもっていること、そしてそれが高齢者の「生きがい」につながっているという調査結果がある。

例えば、2002年度の広島県政世論調査によると、広島県における農村芸能としての神楽の存在は他地域には見られないものであった。「あなたが、この1年間で、文化施設等へ出かけて観賞、見学した文化、芸能に関する催しは何ですか」という質問に対して広島県全体では、「映画」(29.3%)、「日本画」(17.9%)、「洋画」(14.8)に続き、「神楽」(8.2%)が第4位に入っている。さらに、我々の調査地域が含まれる備北地方（広島県県北）に限定すると、「映画」(18.8%)に続き、「神楽」(18.4%)であった。

それでは、なぜ神楽なのか。それほどまでに親しみのある神楽とは何か、その神楽と地域社会の関係を浮き彫りにすることの必要に迫られた。元来、神楽は「むら」のシンボルとしての豊穡を感謝する氏神様の祭りであり、そのため「むら」ごとに神楽団が存在し、広島市都市圏の外延市域と、その周縁の農村部だけでも100を超える（広島県内では約200団体）。これは、戦前、戦後、人口が激しく都市へ流出した時代でさえ「むら」から神楽団が消滅することはなかった。

文字どおり神楽は「むら」社会、共同体のシンボルとして昔も今も存在し、その活動は様相を変えながらも展開している。そこには、神楽が伝承文化であるということの意味が大きい。農作業は技術が高度化することによって高齢者はそこからはじき出され、さらに核家族化によって、家族内での高齢者の地位、役割も変わり、その分だけ地域社会での高齢者の役割も低下した。それに地域内での若者たちによる長老への尊敬度も落ちてきたが、神楽だけは高齢者によって伝承されなければならない存在であったために、神楽による若者と高齢者の役割分担は「むら」の氏神様のもとで継承されてきた。これは農作業から離れた高齢者や若者たちにとっても、その伝承は変わることがない。教わらなければ舞えないし、楽も奏す

ることはできない。神楽は子どもから青年までが舞い、加齢とともに指導者となり、観者と移っていく。今日の広島県の農山村のように耕作放棄地が各地にみられ、「限界集落」とまで研究者やメディアにラベリングされる時代になっても、共通した「むら」の人たちのエートスの基底をなす秩序や価値観を形成しているのが神楽である。

「神楽は生きがいです。自分の気持や生き方までも表現できる場です。大勢の観客から拍手をもらえることは日常生活ではなかなかありません。とくに若い団員たちにはそれが魅力なのではないでしょうか」, 「超高齢社会を迎えた農山村社会の、持続的で、それも発展的な地域再生への糸口の発見につながる可能性を秘めているとさえ予感させるものがある」(日隈, 他 2006)。

II. 高齢者の生きがい研究の類型

1. 高齢者の生きがい概念に関する研究

「生きがい」という言葉のもつ概念は曖昧であり、例えば子どもの成長を見るのが「生きがい」という素朴で個人的で身近なものから、社会参加と「生きがい」、余暇活動と「生きがい」、というように積極的で社会的広がりをもつものにまで類型化されたものもある。

しかし、一般的な「生きがい」の概念について辞書的定義および先行理論から整理してみると、「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと。「一を感じる」(広辞苑第5版), 「生きるに値するだけの価値。生きていることの喜びや幸福感」(大辞林)。「religion [a/one's~], reason for living [being] [a/one's~], live for O, thrive」(ジーニアス和英辞典第2版), 「사는 보람 (生きる甲斐), 살의 보람 (人生・生命・生の甲斐)」(エッセンス日韓辞典第二版)。ちなみに韓国/朝鮮語の「ボーラム」という言葉の意味は「生きがい」に似ているものの、実際には「ボーラム」という言葉は「甲斐」を意味し、日常で頻繁に使用される言葉である。しかし、外国語で意味やニュアンスがぴったり一致するものの方が少なく、多くの場合われわれは類似概念を用いて理解していることが少なくない。

次にいくつか代表的な先行研究から「生きがい」の定義を整理してみる。

神谷(初版1966; 2004)は、生きがいを「生きがいの対象・源泉」と「生きがい感」に区分して論じている。例えば「生きがいの対象・源泉」とは、たとえば「この子は私の生きがいです」というような場合を指し、「生きがい感」は生きがいを感じている精神状態を意味するとしている。そして「生きがい」を、①生存充実感への欲求をみtasもの(審美的観照, あそび, スポーツ, 趣味活動, 日常生活のささやかなよろこび), ②変化と成長への欲求をみtasもの(学問, 旅行, 登山, 冒険など), ③未来性への欲求をみtasもの(種々な生活目標, 夢, 野心), ④反響への欲求をみtasもの(共感や友情や愛の交流, 優越または支配

によって他人から尊敬や名誉や服従をうけること), ⑤自由への欲求をみたすもの (心の世界をそのせまき, 卑小さからひろくときはなつように作用するものごとや人物), ⑥自己実現への欲求をみたすもの (創造のよろこび), ⑦意味への欲求をみたすもの (存在意義を感じられるようなあらゆる仕事や使命) の7つを挙げている。

ただし, 生きがいの対象・源泉は生きがい感を構成する一つの要素だと考えることもでき, 両者はしばしば混同され曖昧な概念となっている。

小林 (1989) は, 「生きがい」とは, 「働किがい」や「遊びがい」とは別のものであり, あくまでも「生きるかい」であり, 「生きていく意味をもたらしもの」「自分の可能性を伸ばしていく自己実現の過程」であるとしながら, 「自分が必要とされている」という感じがあるときに, 人は生きがいを感じるとしている。

和田 (2001) は, 神谷の生きがい論を引用しながら, 最も強く生きがいを感じるという意味での生きがいの理念型は「自分がしたいと思うことと社会的な義務とが一致したときだと思われる」とし, 個人の欲求充足という側面と社会的義務の達成という側面が同時に満たされるとき最も理想的な形態で得られるとする。

飯田 (2003) は, 「自分という人間の存在価値の認識から生じる, 『より価値ある人生を創造しようとする意志』のことをいう」と定義し, 生きがいは本来何か自分の外部にある源泉からもたらされるものではなく, 創造的に生きたいという自らの意志の有無が問題となるという。

金子 (2006) は, 「生きる喜び」だとし, 社会参加, 家族交流, 友人交際, 趣味娯楽の4つに80%が整理され, これ以外にギャンブルまで含んで5つの「生きる喜び」が存在するとしている。

小林 (1989) や和田 (2001) らが生きがいには社会的価値を有し, 自身にとっての主観的な価値ではないと述べているのに対し, 近藤 (2007) は, 生きがい感はいくまで主観であると述べる。生きがいの目的はいくまで主観的な生の延長とのみ考えられるべきで, 本人にとって精神的に生きる意欲を高めるものであればよく, たとえばアル中患者の酒や麻薬患者の麻薬に対する生きがいはたとえそれが客観的に生の延長につながらないものであってもよいとさえいっている。

2. 高齢者の生きがいに関する諸調査と生きがい感測定尺度

1) 高齢者の健康に関する意識調査 (内閣府)

全国の60歳以上の男女2,364人を対象として1997年2月末から3月初めにかけて行われた調査である。「生きがい」に関する項目の結果をみると, 現在, 生きがいを「感じている」は78.6%であり, うち「十分感じている」(39.0%), 「多少感じている」(39.6%)「感じてい

ない」は17.9%，うち「あまり感じていない」(15.6%)，「まったく感じていない」(2.2%)となっている。年齢階級別にみると，年齢が高くなるにつれ，生きがいを「感じている」が低くなっている。

「どんなときに生きがいをを感じるか(複数回答)」では，「孫など家族との団らんの時」が44.1と最も多かった。以下，「趣味やスポーツに熱中している時」(33.5%)，「仕事に打ち込んでいる時」31.8%，「旅行に行っている時」(30.7%)，「テレビを見たりラジオを聞いている時」(29.4%)，「友人や知人と食事，雑談している時」(28.5%)，「夫婦団らんの時」(26.0%)，「おいしい物を食べている時」(17.4%)，「他人から感謝された時」(12.1%)，「勉強や教養などに身を入れている時」(8.8%)，「社会奉仕や地域活動をしている時」(8.0%)，「若い世代と交流している時」(7.7%)，「収入があった時」(6.5%)となっている。

2) 高齢者の健康に関する意識調査(内閣府)

1997年度調査後，2002年に行われた全国の65歳以上の男女2,308人を対象に調査では，調査項目をみると「生きがい」に関する項目が「現在の楽しみ」という表現に代わっている。

普段の生活の中での楽しみに関する項目では，「テレビを見たり，ラジオを聞いたりすること」が63.8%で最も多かった。以下，「趣味やスポーツをすること」(36.0%)，「友人や知人と食事，雑談をすること」(30.5%)，「旅行に行くこと」(28.1%)，「孫など家族と過ごすこと」(25.7%)，「おいしいものを食べること」(20.5%)，「夫婦一緒に過ごすこと」(17.7%)，「仕事をすること」(16.1%)，「お酒をのむこと」(11.6%)，「勉強したり教養などを身につけること」(9.2%)，「社会奉仕や地域活動をすること」(7.6%)，「若い世代と交流すること」(7.2%)，「犬や猫などのペットと過ごすこと」(5.9%)，「タバコを吸うこと」(4.7%)，「ゲーム(囲碁，将棋，トランプ，マージャンなど)をすること」(3.7%)，「競馬やパチンコなどの賭け事をすること」(2.3%)，「その他」3.9%，「わからない」(2.4%)であった(複数回答)。

3) 第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査(内閣府)

内閣府が2005年度にまとめた世界5カ国(日本，アメリカ，韓国，ドイツ，フランス)の60歳以上の男女を対象に行われた調査である。回収数は日本842，アメリカ1,000，韓国1,018，ドイツ1,023，フランス1,030であった。

「生きがい(生きていることの喜びや楽しみを実感すること)を感じるのはどのような時か」という質問に対して，各国とも「子どもや孫など家族との団らんの時」(日本48.2%，アメリカ71.2%，韓国63.2%，ドイツ62.7%，フランス63.8%)の割合が最も高くなっている。2番目は，日本では「趣味に熱中している時」(38.1%)が高く，日本を除く国では「友人や知

人と食事，雑談している時」(アメリカ59.1%，韓国46.6%，ドイツ51.7%，フランス34.3%)となっている(表3)。

表3 生きがいを感じる時 (複数回答) (%)

	日 本	アメリカ	韓 国	ドイツ	フランス
1. 仕事にうちこんでいる時	16.9	29.6	20.2	16.0	7.0
2. 勉強や教養などに身をいれている時	8.9	9.4	3.6	10.4	0.7
3. 趣味に熱中している時	②38.1	③42.9	15.8	④46.5	③33.2
4. スポーツに熱中している時	8.2	9.1	4.9	16.1	8.1
5. 夫婦団らんの時	25.5	39.1	25.3	38.4	⑤30.5
6. 子どもや孫など家族との団らんの時	①48.2	①71.2	①63.2	①62.7	①63.8
7. 友人や知人と食事，雑談している時	⑤32.9	②59.1	②46.6	②51.7	②34.3
8. テレビを見たり，ラジオを聞いている時	③33.4	⑤42.0	⑤26.0	39.7	28.5
9. 社会奉仕や地域活動をしている時	9.0	25.3	6.7	15.3	8.3
10. 旅行に行っている時	④33.3	41.9	19.2	③47.2	④31.1
11. 他人から感謝された時	13.9	41.5	21.9	39.9	17.8
12. 収入があった時	7.7	21.3	③42.0	14.4	3.5
13. おいしい物を食べている時	29.8	④42.6	④37.6	⑤40.9	28.8
14. 若い世代と交流している時	8.8	28.6	11.7	16.7	17.1
15. おしゃれをする時	10.3	25.7	10.8	21.1	9.0
16. 犬や猫などのペットと過ごす時	9.4	23.8	2.3	17.0	16.4
17. その他	5.3	2.3	2.8	5.1	1.1
18. わからない	2.9	1.6	6.4	1.3	2.7

(内閣府，第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査を元に作成)

上記3つの調査結果から，高齢者の生きがいを感じる時に最も多いものは「孫など家族と過ごすこと」であった。以下，生きがい感を強く感じる順に，友人交際，インフォーマル活動(趣味・娯楽など)，フォーマル活動(仕事，社会奉仕など)にまとめることができる。

2002年度調査で最も多かった「テレビを見たり，ラジオを聞いたりすること」(63.8%)は，「普段の楽しみ」においては強い要素あっても「生きがいを感じる」にはやや弱い要素であることがわかる。

鶴若(2003)は，高齢者の生きがいに関して，多くの研究が，高齢者の生活満足度や心理的幸福感などの測定や研究者自身が「生きがい」の意味を設定した上で，高齢者に選択をってもらう質問紙による研究が主流であったと指摘し，特別養護老人ホームなどの施設入所者

のうち後期高齢者を対象に高齢者自身の語り（ナラティブ）から高齢者の生きがい感の構成要素を抽出している。

結果、高齢者の生きがい感は、①連帯感（他者とのコミュニケーション、神・仏・先祖、自然との関係性を通して得られるもの）、②充実感・満足感・幸福感（生活全般から得られる安定や充実。平穏な日常を享受できることの喜び。今までの人生への満足感・幸福感）、③達成感・追求感（何かを達成するまたは追及しているという感情・感覚。自己の向上を促すような活動、取り組み）、④有用感（自分の能力を発揮して何かの役に立っている、貢献していると思える感情・感覚）、⑤価値（信念や生活信条にかかわるもの。人生の指針や哲学。愛、信仰、感謝、希望、自由、自立、伝承、誠実）の5つによって構成されており、これらは互いに関連しあっているとす。

逆に、要介護状態にあること、施設に入所していること、自立できないことが「生きがい」の阻害要因となっている。施設で暮らす高齢者は、そこに対応して暮らすことが自分自身に課せられ、そうした中では「生きがい」など求められないものだと認識させられ「生きがい」を求めようという欲求さえも抑えられてしまっていると述べている。

こうした高齢者の生きがい感を測定する研究は、坂本（2003）によると、社会老年学の分野で積み重ねられてきた離脱理論や役割理論といった古典理論をはじめとし、1960年代から70年代にかけてアメリカで研究開発された“幸福な老い”に関する研究および“幸福な老いの程度”を測定する尺度の理論枠組みを借用したかたちで行われてきた。

近藤（2007）は、Lawton（1975）の主観的幸福感を測定する尺度であるPGCモラルスケール（Philadelphia Geriatric Centre Morale Scale）や生活満足度尺度A（Life Satisfaction Index A: LSIA, Neugarten, 1961）を紹介しながらも、アメリカから輸入されたスケールは日本人のいう生きがいの概念とは別の概念を含んでいると指摘している。彼自身、調査にもとづいた生きがいの操作的定義および生きがい測定スケール（高齢者向け生きがい感スケール[K-I式・K-II式]）を作成している（巻末資料参照）。

K-1式は、生きがい感に関する文献の概念調査から導き出された高齢者の生きがい感の操作的定義であり、高齢者の生きがい感は「毎日の生活の中で、なにごとにも目的をもって意欲的であり、自分は家族や人の役に立つ存在であり、自分がいなければとの自覚をもって生きていく張り合い意識である。さらになにかを達成した、少しでも向上した、人に認めてもらっていると思えるときにも、もてる意識である」としている。

K-2式は、高齢者の自由記述から導き出された高齢者の生きがい感の操作的定義であり、「残りの人生において目的達成に積極的であるが、他者とよい関係をつくり、同時にゆとりをもって生活を楽しむことも大切と考える意識である」としている。

Ⅲ. まとめと今後の課題

1. 構造と機能からみた高齢者の生きがい感

図3は先行研究から得られた高齢者の生きがい感を構造と機能モデルで図式化したものである。

上記で検討したように、高齢者の生きがい感の構造は家族、フォーマル活動（仕事、奉仕活動、地域役員等）、友人、インフォーマル活動（学習、趣味・娯楽等）の要素からなっているとす。各要素はばらばらに独立して存在しているわけではなく、互いに複雑に関係しあっている。また各要素は、要素同士の変化や外部の環境変化にともなって拡大、縮小、喪失、獲得といった変化を行う。例えば家族要素の変化を例に挙げるならば、配偶者の死亡によって生きがい感のうちの家族要素を喪失したが、後ほど新たに孫が誕生したことによって、別の形態ではあるが、家族要素を再獲得できたという場合がある。また我々の調査研究対象地域（広島県旧芸北町）でも、神楽という地域文化のように高齢者の中でも失われることのない地位、役割が確保されているものもあるが、一般的に高齢化によって伝統的地域文化、習慣、行事から引退することになって、社会的役割が失われても、行政によって用意された社会活動に参加することで満足度が獲得されている。さらに特別養護老人ホームでは達成されにくい満足感もグループホームの登場で最低限の役割分担が与えられ尊厳が確保される場合もある。

さらに、高齢者の生きがい感の構造の形態に影響を与える要因としては、性格特性（内向・外向的、抑うつ等）、経済力、経歴、健康状態などがあげられる。例えば、外向的な性格で経済力がある人の場合、生きがい感の構造におけるフォーマル活動や友人の要素の占める部

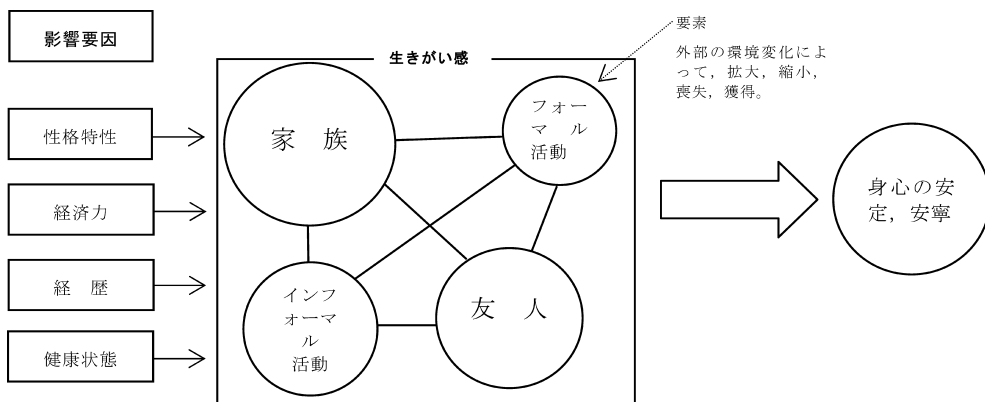


図3 構造と機能からみた高齢者の生きがい感

分が大きくなったりするであろう。

鶴若（2003）は高齢者の生きがい感に関する先行研究・調査を検討する中で、一般的な生きがい感と高齢者の生きがい感の異なる部分として、高齢者の生きがい感には使命感に燃える未来志向性や自己実現よりも過去の経歴や今の生活の肯定、満足感に占める部分が多いこと、家族の健康、幸福を願い自己の生きがいを投影していることなどが特徴として報告している。

結論として、高齢者の多くが、生きがい感を家庭を中心とした比較的狭い日常生活圏内で感じている傾向が強い。そしてその形態は当然のことながら、その国や地域の制度や経済水準、文化、習慣、慣習によって異なったものが見える。高齢者の生きがい感がその地域社会における諸変数（要素）の相対的分け前（分配）の充足度としての一つの指標になるのではないかという仮説がこれからの超高齢社会研究の課題となる。

今後の研究課題はこうした仮説をもとに、3つの次元からの研究アプローチが必要であると考えられる。一つは、時間軸としての個人のライフコースの変遷に、二つは、空間軸としての地域社会と個人を含めた家族の社会、三つ目は、そうした時間軸と空間軸の変容の中で高齢者の意識、世界観の変化。こうした視点から高齢者の生きがい研究の地平を見る眼が、必要となるであろう。

引用文献

- 日隈健一, 他, 2008, 土と人とむらと, 一広島県, 旧芸北町からの報告—広島修道大学研究叢書, 第141号, pp122~125.
- _____, 2006, 神楽活動団体調査報告, NPO 広島神楽芸術研究所.
- _____, 2004, 高齢化社会における地域福祉に関する研究—広島県山県郡芸北町を事例として—, 広島修大論集, 第45巻, 第1号 (人文編), pp367~368, pp373~381.
- _____, 2001, 高齢化社会と地域福祉 2—日韓の高齢者の「生活安定度」評価における比較研究—, 広島修大論集, 第41巻, 第2号 (人文編) pp423~427.
- _____, 1996, 高齢化社会と地域福祉に関する研究(4)—広島県芸北町を事例に政策対応の効果と残された課題—, 広島修大論集, 第37巻第1号 (人文編) PP153~154
- 金子勝司, 2006, 「M 町における高齢者の生きがい活動の実態と今後の方向性について」『共栄学園短期大学研究紀要第22号』.
- 神谷美恵子, 2004, 『生きがいについて』みすず書房.
- 小林 司, 1989, 『「生きがい」とは何か』日本放送出版協会.
- ゴードン・マシューズ著 / 宮川陽子訳, 2001, 「生きがいの文化的文脈」『生きがいの社会学』弘文堂.
- 近藤 勉, 2007, 『生きがいを測る—生きがい感てなに?』ナカニシヤ出版.
- 若鶴麻里, 2003, 「語り (ナラティブ) からみる高齢者の生きがい」早稲田大学大学院博士 (人間科学) 学位論文.
- 和田修一, 2001, 「近代社会における自己と生きがい」『生きがいの社会学』弘文堂.

参 考 文 献

- 高橋勇悦, 2001, 「生きがいの社会学」『生きがいの社会学』弘文堂.
- 高間由美子・杉原利治, 2002, 「高齢者の社会参加と生きがいに関する研究-1. 高齢者の社会参加の意義」『東海女子短期大学紀要第28号』.
- , 2003, 「高齢者の社会参加と生きがいに関する研究-2. 高齢者の社会参加の現状と問題点」『東海女子短期大学紀要第29号』.
- 栃本一三郎, 2007, 「人口減少社会のなかでの高齢社会の展望」『高齢期を支える社会福祉システム』, 放送大学教育振興会.
- 内閣府, 2008, 「平成20年版高齢社会白書」株式会社ぎょうせい.
- , 2006, 「第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」.
- , 2003, 「高齢者の健康に関する意識調査」.
- , 1997, 「高齢者の健康に関する意識調査」.
- 野呂芳明, 2000, 「現代福祉国家と「生きがい」」『社会学年誌41』早稲田社会学会.
- 野村千文, 2005, 「「高齢者の生きがい」の概念分析」『日本看護科学会誌』.
- 馬場哲雄, 2006, 「高齢者の健康, 余暇活動, 生きがいに関する調査研究 (I) —福岡県北九州市小倉南区におけるインタビュー調査から—」『日本女子大学紀要人間社会学部第17号』.
- , 2007, 「高齢者の健康, 余暇活動, 生きがいに関する調査研究 (II) —福岡県北九州市小倉南区におけるインタビュー調査から—」『日本女子大学紀要人間社会学部第18号』.
- 藤井美和, 2007, 「高齢期の QOL とスピリチュアリティ」『高齢期を支える社会福祉システム』, 放送大学教育振興会.
- 保坂恵美子, 1984, 「過疎高齢者の生活実態と意識 IV. 高齢者の生きがい意識と価値体系」『鹿児島女子大学研究紀要第五卷第一号』.
- 本間容子・岡田みゆき, 2005, 「高齢者の生きがい」『釧路論集—北海道教育大学釧路校研究紀要—第37号』.
- 松成 恵, 2004, 「高齢者の楽しみ・生きがい—独居後期高齢者事例研究—」『山口県立大学生生活学科部研究報告第30巻』.
- 女川総司・中本達人, 1999, 「各国の高齢化率と生きがい創出支援施策の類型文型」『金沢大学共同研究センター研究成果報告集第3号』.
- 森 俊太, 2001, 「日常世界と生きがいの関係」『生きがいの社会学』弘文堂.
- , 2000, 「高齢者の生きがい」『社会学年誌41』早稲田社会学会.
- 吉原裕美子・本多ふく代, 1998, 「在宅要介護高齢者の主観的幸福感に関する報告—質問紙調査とインタビューを通しての考察—」『茨城県立医療大学紀要第3巻』.

■ 資料

PGC モラルスケール (Philadelphia Geriatric Centre Morale Scale) (Lawton, 1975)

	はい	いいえ
①自分の人生は、年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくとあなたは感じますか。	0	1
②あなたは去年と同じように元気だと思っていますか。	1	0
③さびしいと感じることはありますか。	0	1
④最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか。	0	1
⑤家族や親せきや友人との行き来に満足していますか。	1	0
⑥あなたは、年をとって、前よりも役に立たなくなったと思いますか。	0	1
⑦心配だったり、気になったりして、眠れないことがありますか。	0	1
⑧年をとるということは、若い時に考えていたよりよいと思いますか。	1	0
⑨生きていても仕方がないと思うことがありますか。	0	1
⑩あなたは若い時と同じように幸福だと思えますか。	1	0
⑪悲しいことがたくさんあると感じますか。	0	1
⑫あなたは心配なことがたくさんあると感じますか。	0	1
⑬前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。	0	1
⑭生きることは大変さびしいと思えますか。	0	1
⑮今の生活に満足していますか。	1	0
⑯物事を、いつも深刻に考える方ですか。	0	1
⑰あなたは、心配ごとがあるとすぐおろおろする方ですか。	0	1

生活満足度尺度 A (Life Satisfaction Index A:LSIA) (Neugarten, 1961)

	はい	わからない	いいえ
①年をとるということは、若いときに考えていたよりはよい。	1	0	0
②私の人生は、ほかの人に比べると運にめぐまれていた。	1	0	0
③今は、私の人生で一番陰気な時期だ	0	0	1
④今、私は若い時と同じように幸福だ	1	0	0
⑤私の人生は、やりかたによっては今よりもっと幸せになれたかもしれない	0	0	1
⑥私の人生で、今が最高の時期だ	1	0	0
⑦私がやっていることは、たいい退屈で単調だ	0	0	1
⑧将来、何か面白いこと、楽しいことがあると期待している	1	0	0
⑨私は、自分がやっていることを、今でも前と同じように面白いと感じている	1	0	0
⑩年をとったし、少しばかり疲れた	0	0	1

高崎・日隈：高齢化社会と地域福祉 (15)

	はい	わからない	いいえ
⑪年をとったとは思いますが、別に気にならない	1	0	0
⑫過去をふりかえてみて、まあ満足だ	1	0	0
⑬もし、過去を変えることができたとしても、変えようとは思わない	1	0	0
⑭同じ年齢の人とくらべて、私はばかなことをたくさんしてきた	0	0	1
⑮同じ年齢の人とくらべて、私の姿、形はよい方だと思う	1	0	0
⑯私は、10ヶ月後先、あるいは1年先の計画をたてている	1	0	0
⑰過去を振り返ってみると、自分は求めていた重要なことをほとんど手に入れることができなかった	0	0	1
⑱ほかの人とくらべると、私はふさぎこむことが多い	0	0	1
⑲私は人生で求めていたことを、かなりの程度実現できた	0	0	1
⑳一般にいわれているのとは違って、普通の人の生活は悪くなってきている	0	0	1

高齢者向け生きがい感スケール (K-I 式) (近藤, 2007)

	はい	どちらでもない	いいえ
①私には家庭の内または外で役割がある	2	1	0
②毎日を何となく惰性で過ごしている	0	1	2
③私には心のよりどころ、励みとするものがある	2	1	0
④何もかもむなしと思うことがある	0	1	2
⑤私にはまだやりたいことがある	2	1	0
⑥自分が向上したと思えることがある	0	1	2
⑦私がいなければ駄目だと思うことがある	2	1	0
⑧今の生活に張り合いを感じている	2	1	0
⑨何のために生きているのかわからないと思うことがある	0	1	2
⑩私は世の中や家族のためになることをしていると思う	2	1	0
⑪世の中がどうなっていくのか、もっと見ていきたいと思う	2	1	0
⑫今日は何をして過ごそうかと困ることがある	0	1	2
⑬まだ死ぬ訳にはいかないとと思っている	2	1	0
⑭他人から認められ評価されたと思えることがある	2	1	0
⑮何かなしとげたと思えることがある	2	1	0
⑯私は家族や他人から期待され頼りにされている	2	1	0

高齢者向け生きがい感スケール (K-II 式) (近藤, 2007)

	はい	どちらでもない	いいえ
1. 若い人と楽しい会話をよくします	2	1	0
2. 私は心身ともにゆとりをもっています	0	1	2
3. 孫や子供の成長をよく見聞きします	2	1	0
4. 年配であるがゆえに教えてあげられることがよくあります	2	1	0
5. 自分にしかできないと思えることをする時があります	2	1	0
6. 将来に夢と希望をもっています	2	1	0
7. 自分の作品がほめられることがよくあります	2	1	0
8. 精一杯活動したと思える日がよくあります	2	1	0
9. この世で自分が存在したあとを残すことができたと思っています	2	1	0
10. 生活は安定していると思います	2	1	0
11. 自分の努力による成果があらわれたと思えることがよくあります	2	1	0
12. 私は家族や人から感謝されるのがよくあります	2	1	0
13. 社会に貢献したと思えることがあります	2	1	0
14. 目的をもって取組んでいるものがあります	2	1	0
15. 新しい知識を得たり、技術を学んだと思うことがよくあります	2	1	0
16. こちらの話をよくわかってくれたと思えることがあります	2	1	0
17. 私は周囲から認められ評価されています	2	1	0
18. 自分の意見が通ったと思うことがよくあります	2	1	0
19. どうしても生きねばならないと思うことがあります	2	1	0
20. 何かよいことをしたと思えることがよくあります	2	1	0
21. おいしい料理によく出会います	2	1	0
22. 自分の親切や真心が相手に伝わったと思えることがよくあります	2	1	0
23. まだまだ意欲があります	2	1	0
24. 私の毎日は充実しています	2	1	0
25. 私は家族や人のために役立っていると思います	2	1	0
26. 私には夢中になれるものがあります	2	1	0
27. 家族や人から頼られていると感じています	2	1	0

いずれのスケールも点数が高いほど幸福感あるいは生きがい感が高いことを示す。